



## ティー・ブレイク

NO.78

### 歯医者と弁理士

東京の歯医者にかかってまず驚いたのは、患者の痛みがなるべく低減されるような工夫がなされているということである。もちろん、歯医者での治療の最中に全く痛みが伴わないということはないが、削りが深くなるような場合には必ず麻酔をするし、その麻酔にしても、針が細くて痛みが少くない。

であるから、これは昔から見れば考えられないことではあるが、歯科医院に行くのにそれほど大きな抵抗は感じない。

もしかしたら東京在住の方々には、それこそ逆に驚かれることなのかもしれないが、私の故郷の歯科医院では、患者の痛みを低減するような工夫がされることなどあり得なかったのである。当時の私にとって歯医者というのは、「すごく」痛い治療をするところであり、世の中で最も嫌いな場所であった。そもそも麻酔をかけること自体が、痛い。

とにかく私の故郷の歯医者は乱暴であった。治療中に患者が痛がっていても、お構い無しである。患者が痛がるような治療をしても、客足が途絶えないからであろう。考えてみれば、私の故郷の地方都市には、歯医者数が数えるほどしかなかった。

もし、故郷の歯医者の治療が患者の都合など全く考えない「土族の商法」的な治療を行っているのであれば、私の周囲にいる東京の歯医者というのはそれこそ激しい競争の中を生きているに違いない。

ところで、これは非常に穿った見方かもしれないが、医者、歯医者に対する見方と弁理士の弁理士に対する見方というのは、非常に似通った点があるような気がする。医者達は歯医者のことを「一般的な医療技術については十分に分かってはいないが、自分達が入り込めないような特殊技能を持っており、ちょっと扱いにくく、しかも小金持ちが多い嫌なやつら」と思っているということであり、これを聞かされたときは流石に笑ってしまった。

ただ、顎の骨はどうするのか。歯医者の領域でもあるような医者の領域でもあるような、微妙なところである。実際に、顎の骨にチタン製のベースを埋め込み、その上に義歯を固定する「インプラント」という技術があるが、これは現在では歯科医が行っているようである。

けれども、これを「うまく」行える人というのは、ほんの一握りであるらしく、歯医者の看板を見かけることは多いにしても、その中から名医を探し出すのは極めて難しい。

本やテレビで頻繁に紹介される、とある高名な歯医者さんでは、抜く必要が無い歯まで抜くような治療をするそうである。このような拝金主義がまかり通るといってもこれまた問題であるが、どこかで聞いたような話でもあるだけに、規模の大きさや知名度というのも当てにはできない。

「では、どうやって探せばよいのか」と半ば呆れた顔で問い掛けると、「それは我々が弁理士さんを選ぶときも同じです。特に重要な案件のときにはね」と逆に言われてしまったのである。

(正)